定本 織田作之助全集 第八巻

定本 織田作之助全集

第八巻

文泉堂書店

定本 **織田作之助全集　第八巻**
〈日本文学全集・選集叢刊第6次〉

昭和五十一年四月二十五日発行
著　　者　織田作之助
発 行 者　谷地秀祐
印 刷 所　(株)平河工業社
製 本 所　(財)印刷局朝陽会
発 行 所　文泉堂書店
本　店　東京都千代田区神田神保町二―一四―六
電　話　東京(03)二六五局八九八一番(代表)
出版部　東京都千代田区神田神保町一―四九―一
電　話　東京(03)二六五局八九八三番
二九四局〇二五九番

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

定本 織田作之助全集 第八巻 目次

文学について

西鶴新論……一一
ジュリアン・ソレル……九七
二流文楽論……一〇七
可能性の文学……一一五
断片……一三二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

演劇について

シング劇に関する雑稿……二〇五
戯曲論序説……二一三
戯曲と新劇に就て……二二〇
現代劇の一方向……二二六

大阪について

大阪発見……二三三
大阪論……二四〇
大阪の恩人……二五七
大阪の可能性……二六四
大阪の憂鬱……二七一
断片……二七九

雑稿……三〇九
日記……三五五
書簡……三八五
書簡（補遺）……四〇九
解説……花田清輝……四五九
作品解題……青山光二……四六六
年譜……青山光二……四七一

定本

織田作之助全集　第八巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

文学について

原

书

缺

页

原

书

缺

页

例えば「日本永代蔵」巻三の「煎じやう常とはかはる問薬」がそれだ。

四百四病は世に名医ありて験気をえたることかならずなり。人は智慧才覚にもよらず貧病のくるしみ、是をなほせる療治のありやと、家有徳なるかたに尋ねければ、今迄それをしらず、養生ざかりを四十の陰まで、うかうかと暮されし事よ、少し見立おそけれ共、いまだよい所あるは、革足袋に雪踏を常住帯るゝ心からは、分限にもなり給はん、長者丸といへる妙薬の方組伝へ申べし。△朝起五両△家職二十両△夜詰八両△始末十両△達者七両、此五十両を細かにして胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入、是を朝夕呑込からは、長者にならざるといふ事なし。

この「日本永代蔵」は副題が「大福新長者教」となっているのを見てもわかるように、寛永四年の「長者教」（作者不詳）の向うを張って書いたものだけに、いわば町人訓ともいうべき教訓的意図の多い作品だが、この一節はなかんずくその句いが濃く、朝起五両以下の長者丸の処方箋などその代表的なものである。ところで、「長者教」にもこれと同様の一節があり、福の神十人御子として、

貯へ太郎たねもち、朝おき次郎むねきよ、算用三郎かねます、内ゐの四郎家吉、五しゃう五郎なをます、会釈六郎為吉、有合七郎家康、斟酌八郎末吉、物こらへの九郎重吉、心たて十郎末高。

が挙げてあり、ここにも三郎、四郎などと数字が出て来るが、西鶴はそれを一歩進めて、たとえば朝おき次郎の代りに、いきなり朝起五両とやる。また、同じ「日本永代蔵」巻一の「初午は乗つて来る仕合」には、水間寺の観音で銭一貫を借りた男が、その銭を掛硯の中に入れて置き、

猟師の出船に子細を語りて百づゝかしけるに、かりし人自然の福ありけると遠浦に聞伝へて、せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり、十三年目になりて充一貫のぜに八千百九十二貫にかさみ、

と、あるが、この数字はさすがに数学的に正しい。西鶴は御苦労にも等比級数のむずかしい計算をしているのである。余程の数字好きでなければ、やれないことだ。

しかるに、第二章の「二代目に破る扇の風」を見ると、こんな個処がある。

此をとこ一生のうち草履の鼻緒を踏きらず、釘のかしらに袖をかけて破らず、万に気をつけて、其身一代に二千貫目しこためて、行年八十八歳、世の人あやかり物として升掻をきらせける。さればかぎり有命、此親仁其年の時雨ふる比、憂の雲立ちどころをまたず、頓死の枕に残る男子一人して、此跡を丸どりにして廿一歳より生れ付たる長者なり、此世倅親にまさりて始末を第一にして、あまたの親類に所務わけとて箸かたし散らさず、七日の仕揚、八日目より蔀門口を開けて世をわたる業を大事にかけて、腹のへるをかなしみて、火事の見舞にもはやくは歩まず、しはいせんさくに年くれて、明くれば去年のけふぞ親仁の祥月とて旦那寺に参りて、下向になほむか

しをおもひ出して泪は袖にあまれる此手紬の碁盤縞は命知らずとて親仁の着られしが、おもへば惜しき命、今廿二年生給えは長百なり、若死あそばして大ぶん損かなと、是にまで慾先立て帰るに。（傍点織田）

仔細に見れば実に数字が多い。ところが、あれほど用意周到な西鶴がここでは、八十八歳の親仁が「今廿二年生給へば長百なり」と、――長百は丁百で満百のこと。銭勘定で九十六文を百文とする習慣が当時あったがここではまるまるの百文という意――簡単に計算のまちがいをやっている。無論、廿二年は十二年でなくてはならないのだ。

こういう間違いは例えば「一代男」にもある。即ち、巻一には「五十四までたはぶれし」云々としておきながら、巻八の世之介の年齢は六十歳になっている。何という無頓着さか、ずぼらさか。出鱈目か。

不注意といってしまえば、簡単だが、しかしこういう誤りを平気でやれるところに私は何かしら彼の不逞不逞しい性格を感ずるのである。単に俳諧的だという以上のものがあるではないか。そして、そういう西鶴であってみれば、どうやら見聞覚知の四の二の年まで云々の数字は、良い加減なものではなかったか、と思われるのである。少なくともこれがそのまま彼の正直な履歴書だとは、思えないのである。彼は所謂謹直、小心な私小説家ではなかったし、よしんば私小説家であったとしても、平気で嘘の書ける男であった。

嘉村磯多氏をいきなりここへ出すのは如何なものかと思われるが、例えば嘉村氏のような謹直、峻厳、純粋な私小説家の、いわば自己の業をさらけ出した作品の中にも、随分事実と違った嘘が語られていたという。してみれば、西鶴が嘘だらけの私小説を書くことを想像するなど、至極簡単である。誤解されると困るが、要するに作家とは嘘をつく才能をもった人間の称いである。もっともこの嘘つきには、嘘をつく快感の外に、真実を愛するという強い本能がある。スタンダールなど一生嘘を吐き通した作家だが、またスタンダールほど真実を語った作家は、そう沢山はない筈だ。西鶴はスタンダールほどの嘘つきではなかったが、ともあれ嘘は平気でつけた方である。少なくとも嘘実の境で芸の独楽をまわした作家だ。実に偏すれば、芸の独楽は倒れるものだ。だからといって、しかし、私は彼の作品に現われた私小説的要素を全部否定する気はない。今更いうまでもないが、生活の影が全く作品に投じないほど、おのれを捨て切ることはどんな作家にも出来ない相談だ。出来ると思うのは、単なる小説理論の夢に過ぎない。西鶴の作品にもむろん彼の生活は投影している。（このことに就いては後章で述べる）しかし、それと、見聞覚知四の二の年云々の伝記的要素とは、いくらか話は別だ。その時、四十二歳だったから、四十二歳だと書かなければ、承知できないような、そんな西鶴であろうか。そうまで自己の経歴の織り込みに忠実にならなくとも、もっとほかの場所で忠実になれる西鶴である。話が飛ぶが、大正二年に貿易会社に勤めていたから、大正二年の貿易会社の内部からまず書こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com